



TITLE:

Documentary Film Production on the Dynamics of Relationship regarding HIV in Northern Thailand: A Filmmaker's Perspective in Representing Reality(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Naoi, Riyo

CITATION:

Naoi, Riyo. Documentary Film Production on the Dynamics of Relationship regarding HIV in Northern Thailand: A Filmmaker's Perspective in Representing Reality. 京都大学, 2015, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19102>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により全文は2021-07-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	直井 里予
論文題目	北部タイにおけるHIVをめぐる関係のダイナミクスの映像ドキュメンタリー制作ーリアリティ表象における映画作成者の視点ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文の目的は、現代の北タイ地域社会で生活する HIV 陽性者の日常的なリアリティを構成する（親密-公共圏的な）つながりの変容について、筆者自らが制作したドキュメンタリー映像とその制作（撮影・編集）および上映過程を事例に、(1)ドキュメンタリー映像の対象となった HIV をめぐる社会関係の変容について論じ、(2)ドキュメンタリー映像がその対象とした事象をいかにとらえるかを自己再帰的に考察し、(3)ドキュメンタリー作品の制作の過程で生じる「撮る者ー撮られる者」の関係の動態を分析し、それが映像のリアリティにどのように関与するかを考察する。すなわち本論文は、北タイにおける HIV をめぐる関係の動態の議論と、それを映像で表象することに関わる議論との二重の構造を成している。本論文において「関係」というときに、そこには、HIV をめぐる現地の被写体間の関係のみならず、撮影者と被写体の関係も包含されており、筆者は、その関係こそが映像におけるリアリズムを構成する不可欠な要素であると論じる。</p> <p>序章では、筆者の制作した『アンナの道（完全版）』と『いのちを紡ぐ』という 2 本のドキュメンタリー映像作品を紹介する。そして、本論文の課題である撮影・編集という制作過程を通じて作品が描く世界に、撮影者の視点がいかに関与しているかという問題を提起する。</p> <p>第 1 章では、映像論の枠組みを提示する。具体的には、社会的現実の捉え方、民族誌的表象と映像表象をめぐる問題に関して、文化人類学や社会学、および映像論における既存の議論を取り上げて、本論における視点の関与に関わる課題を論じる。</p> <p>第 2 章は、HIV をめぐる関係の動態に関する先行研究を考察する。まず、HIV をめぐる社会関係について先行研究を概観し、次に HIV がどのように表象されてきたのかを論じ、これまでの研究において、学術論文と映像は別個のアプローチとみなされてきたこと、そして、関係の変容過程を日常の視点から論じる研究の不在を指摘する。</p> <p>第 3 章では、実際の映像制作を通して描いた事象について考察している。北タイにおける一人の HIV 陽性者女性の日常生活に焦点を当てた映画『アンナの道（完全版）』を通して、HIV をめぐる様々な関係（主人公をめぐる親子と夫婦、エイズ孤児、陽性者自助グループ、村人などとの関係）の変容と新たな関係の構築過程をたどり考察する。調査地の P 県 C 郡では調査を開始した 2000 年当初エイズに対する知識は広まりつつあるものの、偏見は未だ根強く残っていた。しかし、HIV 陽性となり、偏見の対象となることを怖れて家にこもっていた陽性者らが、デイケアセンターでの出会いを機に、陽性者同士、新たな関係を構築し、村人とも関係を築き始めた。この一連の過程が考察の一つの中心である。さらに、HIV 問題の長期化と 2003 年以降の抗 HIV 薬の浸透、そしてタイの経済成長により変容した家族（親子、夫婦、祖父母）の役割とその関係を考察し、エイズ孤児と HIV 陽性者の女性が、「病縁」を通し、新たに親密な関係を形成してきたことを示す。</p> <p>第 4 章では、『いのちを紡ぐ』において映像化した HIV 陽性者の日常生活実践や彼女らが</p>			

関わるエイズ・デイケアセンターにおけるケアを通した「協働」や、自助グループの活動が公共空間を形成していく過程を描いている。その際、病院の管轄下でない別の自律型の自助グループがその活動を広げつつあることをも論じている。そして、この過程で 2 つのグループが異なる結果に至った要因として次の 3 点を指摘している。①HIV 陽性者の自律を促すための生活空間のあり様、②公的支援と民間など外部による複合的支援体制、③公に対する私の関係が緊密でありながらゆるやかで流動的であることの 3 点である。この章の結論として、自助グループが関係を持続し展開していくためには、HIV 陽性者が日常生活における共同作業や会話を通してネットワークを構築できるような生活の土台、つまり生活空間の創出が重要であることを述べる。

第 5 章では、「HIV 感染をめぐる関係」を主題に据えた 2 本のドキュメンタリー映像作品を、改めて分析者の観点から考察し、撮影者の視点がどのように映像表象（作品）に関与し、カメラはその関係をいかにリアリティを持って捉えることができるのかという問題を自己再帰的に考察する。そして、（1）ドキュメンタリー映像におけるリアリティとは、現実起こっていることを表象するのみではなく、撮影と編集を通して構成される現実であること、そして、（2）ドキュメンタリー映像は、一般に客観的視点が重要だとみなされる傾向があるが、作り手の主観的な視点が不可避に関与し、撮影者と撮影対象者の相互関係によってつくられるものであることを論じる。

結論では、本論文の議論を総括したうえで、次の点を指摘する。第一に、映像を撮ることは、生きた人と人の関係に深甚な影響を与えずにはおかないものであること。第二に、時間軸に沿って進展する出来事を捉え、その時間と空間を再構築することにより制作過程で撮影者の視点が映像の作り出す現実に大きく関与していること。そして、本論文では、HIV 感染をめぐる関係を撮影・編集する際に、そこに現地の被写体間の関係のみならず、撮影者と被写体の関係も関与しており、その関係こそが映像におけるリアリズムの不可欠な要素であると結論する。そして、本論において映像ドキュメンタリーを作成者として自己再帰的に分析する手法を採用することで、作成者の立ち位置などを含めた視点の変容を明らかにし、映像における現実がどのように構成されているのかを明らかにしたと結ぶ。

(論文審査の結果の要旨)

地域研究や文化人類学において映像記録はこれまでも活用されてきており、特に近年では、学会でも映像作品が取り上げられるようになった。しかし、そこでは記録媒体としての映像が重視され、あたかもカメラが人間より、また映像が文章による記述よりも客観的であることが自明視されてきた。カメラを掲げて現地に入り、フィールドから帰って映像を編集する映像作成者は、映像が映し出す現実にとどのように関与しているか、という点は十分に論じられてこなかった。本博士論文は、ドキュメンタリー作家である筆者が、14年の年月をかけて撮影・制作した2本の映像作品をもとに、北部タイのHIV陽性者と彼らを取り巻く地域社会の人びとについて論じる。さらに、その撮影過程について自ら分析し、作成者の視点が、作品としてのドキュメンタリー映像にとどのように関与しているかを論じる。したがって論文は、映像の対象となった事象を分析する位相と、その映像制作そのものを分析する位相という、二重の相を相互的に捉えた構造を成している。地域研究としても映像論としても、ユニークな試みである（提出された論文には、この2本の映像作品が付されている）。

2本の映像は、北部タイにおけるHIV陽性者と家族や地域社会の変容、そして、タイ国における国レベル・地域レベルでの感染への対策に対して、陽性者が組織する運動や、そこに形成される公共空間の動態を描いている。タイでは、1980年代末からHIV感染が広まり、政府は90年代より対策に乗り出した。映像作品は、病院などの地域の公共施設に自助グループが設立されるようになった2000年から撮影を開始し、2003年に抗HIV薬が投与されるようになった時期を経て、2014年に至る。家族における親子や夫婦関係の変容、自助グループの盛衰、地域における陽性者の新たな自律的な運動の開始など、まさにタイにおけるHIV感染への対応の歴史そのものを、陽性者の視点からミクロに捉えている。論文ではその過程を、まず自ら制作した映像のシークエンスを通してなぞり、解説しながら分析している。その分析自体が、通常の民族誌的記述にとどまらず、映像をベースにしているところにもまた、この論文の独自性を見出すことができる。そのうえで、論文の最後には、その映像作品の制作過程を分析対象とし、作成者としての自らの視点がどのようにその過程で変化し、それが出来上がった映像作品のリアリティにとどのように投影されているかを考察している。

本論文は、以下の四つの学術的貢献によって高く評価することができる。第一に、HIV陽性者をめぐる家族の関係の動態を、映像を介することで微細な視点から分析しえている点である。親子、夫婦の関係の変容の機微を、長期にわたり陽性者の日常生活に近しく関わることによりカメラで捉えており、論文ではそれを分析している。また、エイズ孤児と主人公の関わりから、HIV感染を介して生じる疑似的な親子関係を「病縁」による新たな関係として分析し明らかにしている。これまでのHIV感染をめぐる民族誌や文化人類学的議論において十分に触れられなかった、家族における親密な関係の変化を日常生活から捉えることに成功している。それは、14年という長い年月にわたり地域の陽性者と撮影を通じて関わってきた成果でもある。

第二に、行政主導で設立された地域の自助グループに、陽性者が参加し、そこで陽性者

同士のつながりが形成される過程を、日常的な場面から描いている。また、抗HIV薬をめぐる陽性者の運動の組織をはじめ、陽性者主導の地域レベルの活動を描出し、草の根の組織として成果を上げる運動と公共空間の広がり进行分析している。先行研究では下からの自己統治や陽性者コミュニティなどの概念が提示されてきたが、本論文ではこれが日常生活からどのように立ち上がっているか、いかなる共同性がそこに生み出されているかという、これまで明らかにされてこなかった点を分析している。

第三に、作成者の視点がいかに作品としての映像表象に関与しているかを明らかにしている。映像作成者は、単にカメラを持って客観的な記録を撮っているのではなく、被写体との相互関係を築くことで、また、自らの視点をもってカメラを持つことで、映像に映し出される現実にも、被写体の動きやそこで生み出される現実にも関与していることを、自らの撮影・編集過程を自己再帰的に追いながら分析し、明らかにしている。映像に映し出されるのは、カメラがそのまま掬い取った事実なのではなく、映像のリアリティは、その撮影・編集・上映の過程で作り手、被写体、観客の間で創りだされるものであることを明らかにしている。

第四に、文化人類学や地域研究における映像の有効性を明らかにしている点である。映像の場面構成や、一つ一つのシークエンスを論文中に取り上げて論じる手法により、身体的相互作用や、空間配置など、文章記述のみでは表現することが困難でありながら、しかし、日常的な関係の変化を理解するうえで重要な点を、映像で捉えることで初めて表現し、分析を加えることができおり、そのこと自体が映像の有効性の主張につながっている。

これらの点を総じて、本論は、映像による地域研究の可能性を示すオリジナリティの高い研究成果である。また、事象と映像の二重の位相を論じるという独創的な試みにも成功している。

よって本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月26日、論文の内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

